

7.

611.012:611.36

下空静脈閉塞ヲ伴ヘル「ヘパトーム」ニ就テ

岡山醫科大學病理學教室（田部教授）

八 木 忠 亮

[昭和 6 年 6 月 30 日受稿]

（本論文ノ要旨ハ之ヲ昭和 5 年 2 月第 41 回岡山醫學會總會席上ニ於テ發表セリ。）

Über einen Fall vom Hepatom mit der Obliteration
der Vena cava inferior.

Von

Dr. Tadaaki Yagi.

*Aus dem Pathologischen Institut der Med. Universität Okayama
(Vorstand: Prof. Dr. H. Tanabe).*

Eingegangen am 30. Juni 1931.

Verfasser berichtet über einen 29 jährigen Mann, der klinisch Symptome der Obliteration der Vena cava inferior zeigte und bei dem sich bei der Sektion nicht nur die genannte Veränderung der Vene, sondern an der Leber auch die Bildung von einem Hepatom feststellen liess.

Die Beobachtungen sind kurz zusammengefasst wie folgt:

- 1) Die Obliteration der Vena cava inferior beruht bei diesem Falle auf einer angeborenen Bildungsanomalie und die gleichzeitig gefundene Leberzirrhose höchstwahrscheinlich auf einer chronischen Stauung der oben genannten Vene.
- 2) Deshalb ist das Hepatom bei diesem Falle ohne Zweifel auf dem Boden der Stauungzirrhose der Leber entstanden und steht selbstverständlich in direkter Beziehung mit der Obliteration dieser Vene.
- 3) Histologisch wurde nachgewiesen, dass das Hepatom dieses Falles multizentrisch entsteht und sich in einem frühen Stadium befindet, da die Geschwulstzellen stellenweise ein deutliches Übergangsbild zu normalen Leberzellen darstellen.

(Autoreferat).

第 1 章 緒 言

「ヘパトーム」Hepatom トハ、明治 44 年山極博士ニヨリ「肝臓ニ原發スル上皮細胞性腫瘍中、其ノ實質細胞（肝細胞）ヨリ發生スル腺腫及ビ癌腫」ニ冠セラレタル名稱ナリ、而シテ同氏ハ之ニ關シテ更ニ「總テ肝臓ニ於ケル肝内原發上皮性腫瘍ヲ肝原發癌一腺腫ト總稱シ、之ヲ實質性ト膽管性トニ區別シ、前者ヲ「ヘパトーム」ト總稱シ、肝外ナル輸膽管原發ノモノノミヲ膽管癌一腺腫ト呼ベバ最簡單ナリ」ト曰ヘリ。

抑モ原發性肝臓癌ハ從來比較の稀有ナルモノトセラレタルモ、山極博士等ノ提唱ハ學會ノ興味ヲ喚起シ、識者競ヒテ其ノ症例ノ發見ニ努メタルガ爲メ、之ニ關スル報告相踵ヒデ出デ、却テ本邦ニ於テ歐米諸國ニ比シ遙ニ頻發スルモノナルコト實證サルルニ至レリ。

原發性肝臓癌中、「ヘパトーム」ノ頻度ヲ觀ルニ、本邦ニ於テ山極博士ハ 7485 體中 46 例即チ 0.6% ニ於テ證明シ、肝硬變ヲ伴ヘル「ヘパトーム」ハ 38 例中 33 例即チ 86.84% ヲ算シ、Eggel 氏ノ統計ト合致セリト云ヘリ。

之ニ反シ下空靜脈狹窄或ハ閉塞ヲ伴ヘル「ヘパトーム」ニ至リテハ、甚シク稀有ナルモノニシテ、大正 13 年塚本氏ハ斯カル變化ガ主要要約トシテ成立セル原發性肝臓癌ハ其ノ數 20 例ヲ出デズト謂ヘリ。余ノ本邦文獻中ヨリ得タル所ヲ摘記スレバ那須氏ノ 2 例（第 1 及ビ第 4 例）、塚本氏ノ 1 例、貴家氏ノ 2 例（第 16 及ビ第 17 例）、西川氏ノ 3 例（第 5、第 8 及ビ第 10 例）、木村男氏ノ 1 例、兼松、大久保兩氏ノ 1 例、山極氏ノ 2 例、太田氏ノ 1 例ニ過ギズ。泰西ノ文獻ニ於テモ纔ニ Eppinger, Rosenblatt 氏等ノ少數例ヲ得タルノミ。從テ此ノ下空靜脈狹窄或ハ閉塞ト「ヘパトーム」トノ因果關係等ニ論及セルモノ少ク、其ノ知見明確ヲ缺ク所少カラズ。是レ茲ニ余ノ觀察セル 1 例ヲ報告シ、大方ノ高教ヲ仰グ所以ナリ。

第 2 章 實 驗 例

患者 管〇得〇 男 29 歳 藥劑師

臨牀的診斷 下空靜脈閉塞

遺傳的關係 祖父母ニ特記ス可キモノ無ク、父母健存セリ。

既往症

9 歳ノ時肋膜炎、17—18 歳ノ時淋疾ヲ經過ス。27 歳ノ春頃ヨリ夏季ニ亙リ胃液分泌過多症ニ悩ム。28 歳ノ時即チ昭和 3 年 3 月 10 日夜中ヨリ突然嘔吐及ビ下痢ヲ發シ、約 2 個月間持續セシコトアリ。其ノ當時ヨリ尿量減少シ、6 月 20 日頃ヨリ兩足背ノ浮腫

ニ氣附ク。間モナク浮腫ハ上行シ下腿ニ於テ著明トナリ、腹水ヲ證シ、7 月中旬腹部靜脈ノ怒張ニ氣附ク。8 月 20 日腹水穿刺ヲ受ケ 2000 cc ヲ排除サル。10 月ニ入リテハ浮腫全ク消失シ治癒ニ赴ケリ。然ルニ昭和 4 年 1 月初旬ニ至リ再ビ腹部靜脈怒張ヲ證スルニ至リ、始メ鼠蹊部ヨリ後胸部ニマデ及ベリ。

偶 2 月中旬ニ至リ急ニ稍々大量ノ吐血アリテ腹部膨滿ハ輕快セリト云フ。而モ靜脈ノ怒張ハ依然トシテ存在セリ。

主訴

視力障礙、手指振顫、發語障礙

本病歴

1 週間前ヨリ背部ニ可ナリ激シキ瘙痒感ヲ訴ヘ睡眠ヲ障碍サル。3日前ヨリ左前胸部ニ於ケル疼痛及ビ呼吸困難ヲ訴フルコト約3時間、夫レヨリ視力障碍、手指振顫及ビ發語障碍ヲ起シ、昭和4年6月10日柿沼内科ニ收容サル。

現症

體格中等、皮下脂肪組織ノ發育良。皮膚蒼白ニシテ貧血セルモ、黃疸ヲ認メズ。顔面稍々浮腫狀ヲ呈シ、兩顎下腺多數腫大セリ。

胸部ニ於テハ胸壁下部ノ靜脈怒張セルヲ認ム。心臟ノ上界ハ第4肋間、左界ハ左乳線ノ外側、右界ハ左胸骨線ニシテ心音純。肺臟著變ナシ。

腹部ニ於テハ兩側腹壁靜脈怒張セルモ、肝臟、脾臟ヲ觸レズ。兩側肋弓ノ下方部瀰漫性ニ壓痛アリ。腹水ヲ證セズ。

下肢ニアリテハ脛骨稜ニ輕度ノ浮腫ヲ證ス。膝蓋離反射及ビ「アヒレス」離反射尋常。

血液 Wassermann 氏反應不定著明ナラズ。

其他尿ニ「ウロビリノゲン」ヲ證ス。

經過

入院翌日即チ6月11日夕方ヨリ尿閉ヲ訴ヘ、翌朝自然排尿アリ。6月12日夕食後就眠シタルママ覺醒セズ。6月13日ニハ昏睡狀態トナリ尿失禁ヲ來ス。發熱40°C至。午後9時5分終ニ逝ク。

(以上ハ柿沼教授ノ御厚意ニヨリ病牀日誌ヨリ摘録スルヲ得タリ。茲ニ謹ンデ感謝ノ意ヲ表ス。)

剖檢記錄摘要 (剖檢番號第350號)

病理解剖學的診斷

- 1) 顆粒性肝硬變及ビ原発性肝臟癌
- 2) 下空靜脈閉塞
- 3) 脾腫
- 4) 肺臟、腎臟及ビ脈絡膜鬱血
- 5) 心外膜、肋膜、胃粘膜及ビ漿膜、脈絡膜ノ出血

6) 腦室ノ擴張

7) 氣管枝「カタル」

8) 壊死性胃炎

9) 腎臟實質變性

身長158cm, 體重57.5kg, 體格中等, 營養佳良ナル男性屍。皮膚ハ蒼白ニシテ乾燥シ、稍々黃疸色ヲ呈ス。

腹腔内ニハ液ヲ證セズ。大網膜ニ於ケル淋巴腺ハ1—2小豆大ニ腫大セルヲ認メ、其ノ割面暗赤色一部分灰白色ヲ呈ス。腸間膜淋巴腺亦輕度ニ腫大シ、割面帶赤色ニシテ彈力様鞏固ヲ呈ス。

心臟 重量330g, 大サ當人手掌ノ1.5倍大ニシテ、其ノ周圍徑25cmヲ算ス。心外膜ハ滑澤。心外膜下脂肪組織ノ發育良。右室ノ後面稜ニ近クモ血點アリ。各腔ノ大サ概ネ尋常ニシテ内面滑澤。内柱、乳嘴筋ノ發育尋常。瓣膜裝置ニ異常ナシ。心冠動脈ノ内面ハ滑澤ニシテ閉塞等ヲ認メズ。其ノ他大動脈起首部ニ於テ1箇ノ灰白色ヲ呈スル隆起ヲ認ムル外、滑澤ニシテ著變ナシ。

肺臟 左肺ハ稍々大、表面胸壁ト癒着ヲ認メズ。滑澤ニシテ光澤ヲ有ス。之ヲ壓スルニ捻髮音ヲ觸ルルコト少シ。切面赤褐色ニシテ、之ヲ壓スルニ泡沫狀暗赤色ノ液ヲ出スコト稍々多シ。硬度鞏固。氣管枝ハ泡沫狀ノ液ヲ出シ粘膜充血ス。右肺ハ表面滑澤ナルモ、前面ニ於テ部分的ニ胸壁ト纖維性癒着ヲ爲ス。色一般ニ淡。下葉竇ニ上葉ノ下部ニハ所々小血點ヲ認ム。切面暗赤色、泡沫狀ノ液ヲ出スコト多ク、硬度稍々硬シ。氣管枝粘膜ニハ泡沫狀血液ヲ附着セリ。

肝臟 大サ26.0(内右葉16.0)×15.0×6.5cm, 重量1300g, 表面黃褐色ニシテ著シク細顆粒狀ヲ呈ス。而シテ右葉凸面ニ雀卵大ノ結節1箇、右端前縁ニ近キ部竇ニ膽嚢ト癒着セル肝臟ノ下面ニ各1箇ノ鳩卵大ノ腫瘍結節アリ。尙ホ左葉ノ凸面前縁ノ近クニモ蠶豆大ノ結節アリ。各結節ハ何レモ灰白色又ハ灰白

黃色ニシテ彈力様鞏韌、肝臟實質ト比較的明カニ境界サレ、大ナルモノニアリテハ結締織ノ走行ニヨリ數葉ニ分タルモノアリ。

肝臟剖面ハ濁濁黃色ニシテ顆粒狀ヲ呈シ、小葉像著明ナラズ。硬度鞏韌、壓出血量ニ乏シク、膽管ノ擴大ナシ。

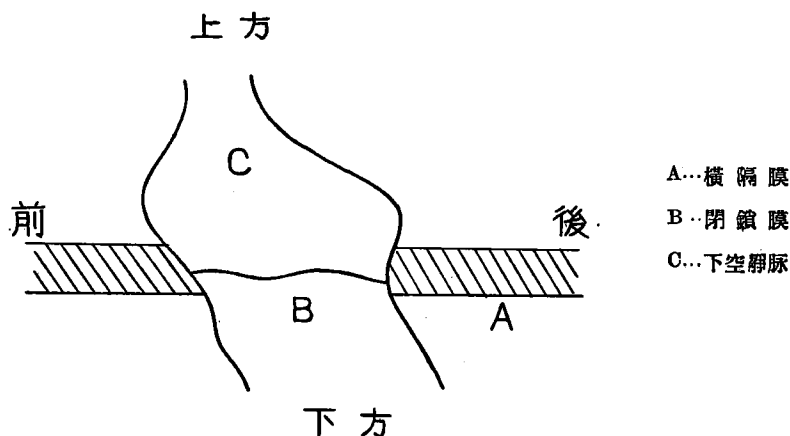
膽囊ニハ中等量ノ粘稠ナル膽汁ヲ容ルル外著變ヲ認メズ。

下空靜脈 横隔膜貫通部ニ於テ内面ニ膜様物形成セラレ、之ニヨリテ全ク管腔ヲ閉鎖サル（第1圖參

照）。閉鎖膜ヨリ上方ノ下空靜脈ニ於テハ、前上方ノ管壁ハ囊狀ニ強ク膨隆セリ。閉鎖膜ノ起首部ニ當ル後方靜脈壁ノ一部ハ著シク肥厚シ、此附近ノ膜部モ亦肥厚シ漸次ニ他ノ菲薄部ニ移行セリ。閉鎖膜ヨリ下方ノ靜脈壁ニ於テハ、閉塞部ヨリ下方7.5 cmノ部ニ於テ直径0.5 cm大ノ1箇ノ肥厚斑ヲ認ム。灰白黃色ニシテ硬度大ナリ。内膜ハ一般ニ滑澤ナリ。

肝靜脈ハ下空靜脈ト會合スル部分ニ於テ壁ノ肥厚ヲ呈シ、殊ニ肝臟ノ後面ニ於ケル部分ニ於テ著明ナリ。

第1圖 下空靜脈閉鎖部縱斷面



脾臟 大サ18.0 × 13.5 × 11.5 cm, 重量840 g, 表面滑澤, 色淡, 被膜ハ緊張ス。剖面ヲ見ルニ脾材ノ走行ハ認メ得ルモ濾胞著明ナラズ。脾髓ハ稍々増量スレドモ質軟ナラズ。壓出血量ニ稍々富メリ。

左腎 大サ13.5 × 12.0 × 4.0 cm, 重量230 g, 被膜ノ剝離容易ニシテ表面滑澤, 暗赤色ヲ呈ス。星芒狀靜脈ノ走行著明ニシテ硬度稍々軟。剖面ヲ見ルニ兩質ノ境ハ著明ニシテ暗赤色ヲ呈シ、髓質ニ於ケル細血管ノ走行著明ナリ。

右腎 大サ18.7 × 7.5 × 3.7 cm, 重量290 g, 表面滑澤ニシテ暗赤色ヲ呈ス。星芒狀靜脈ノ走行著明。切面ハ稍々腫脹シ、色一般ニ暗赤。髓質ノ細血管充盈ス。

大動脈 内面滑澤ニシテ弾力性尋常。

病理組織學的所見

I) 肝臟

組織學的檢索ノ結果ハ各葉各部共ニ殆ド同一ノ所見ヲ得タルヲ以テ、其ノ各ニ就テ述ブル事ヲ止メ、腫瘍部及ビ肝組織ノ2ニ大別シ、前者ニ於テハ特ニ其ノ2—3ノ主要ナル個々ノ結節ニ就テ述ベント欲ス。

A) 肝組織 (腫瘍ナラザル部)

間質ノ結締織ハ著シク増殖シ、小葉ノ構造不規則ナリ。殊ニ肝靜脈壁ニ於テ其ノ肥厚甚シ。間質結締織ノ増殖肥厚強キ部分ニ於テハ彌蔓性ニ出血セル部分アリ。斯ノ如キ出血ハ肝臟實質内ニ於テモ認ムルヲ得。肝靜脈細枝及ビ小葉内毛細管ハ強ク擴張シ、

時トシテ實狀ヲ爲シ血液ヲ充盈ス。間質肥厚部ニ於テモ亦實狀ニ擴張充血セル細血管多數ニ現ハレ、其ノ周圍ニ於テ時トシテ出血ヲ見ル所アリ。其ノ他間質ニハ輕度ノ圓形細胞浸潤アリ。細膽管ハ稍々増加セルモ、其ノ度著シカラズ。

肝細胞ハ脂肪化セルモノアリ。或ハ毛細管擴張ニヨリ壓迫セラレ、細長ノ索ヲナスモノアリ。膠樣結締組織纖維ハ肝細胞索間ニ進入シ、毛細血管壁ニ於テ強ク増加セル所アリ。

腫瘍結節以外ノ略ボ尋常ニ近キ部分ニ於テハ、小葉間質ノ増殖甚ダ乏シク、小葉間結締組織ニハ僅ニ圓形細胞ノ浸潤ヲ認メラルルニ過ギズ。肝細胞ノ一部分ハ核非常ニ大ニシテ、細血管ノ輕度ノ充血ヲ見ル。

B) 腫瘍部

1) 右葉凸面部ノ腫瘍結節

此ノ附近ノ肝組織ハ著シク硬變シ、間質結締組織ノ増殖及ビ著明ナル圓形細胞ノ浸潤ヲ認ム。肝靜脈枝ノ壁ノ肥厚亦著シク、小葉ノ或ルモノニ於テハ稍々 Laenneo 氏肝臟硬變ニ類似セル假性小葉ヲ形成スル所アリ。之ニ接シテ腫瘍組織ノ結節狀増殖ヲ見ル。其ノ腫瘍ハ肝細胞腺腫ノ像ヲ示シ、主トシテ肝細胞ノ細胞索ニ類似セル構造ヲ呈シ、其ノ間ニハ毛細管ハ肝細胞ニ於ケルト同様ノ關係ニ現ハレタリ。此ノ腺腫細胞ハ正常ノ細胞索ヨリ直接ニ移行セル像ヲモ認メ得。即チ「エオジン」ニ強ク染色セル正常ノ肝細胞索ハ直接甚ダ淡明ニシテ、且細胞體ニ乏シク空胞様ノ「クロマチン」ニ富メル核ノ多數ニ現ハレタル細胞索ニ連續セルヲ認ム。此ノ淡明ナル細胞ハ著シク多數ノ群トナリ、或ハ索狀ヲナシ或ハ腺管様ニ中央ニ間隙ヲ現ハシ排列セリ。其ノ間隙ニハ時トシテ「エオジン」ニ強染セル膠樣物質ヲ充タセルモノアリ。更ニ索狀ニ排列セル腺腫細胞ノ間ニハ結締組織ノ著シク増殖セル所アリ。之ニ接シタル部位ニ於テハ其ノ腫瘍細胞ノ益強ク不規則ニ集合シ、殆ド腺管様ノ排列ヲトレリ。若クハ不規則ニ蜂窩狀ニ集合シ全ク非

定型ノ形ヲ現ハシ癌性變化ヲ呈セル所アリ。

2) 右葉右端前緣部ノ腫瘍結節

腫瘍組織ハ結節狀ヲナシ、骰子形或ハ圓形ノ腫瘍細胞ハ不規則ニ集合シ、或ハ蜂窩狀ヲ呈セリ。此ノ部分ニ於テハ間質結締組織ハ非常ニ少量ナレドモ、血管ハ強ク發育シ、比較的規則正シク各細胞群ノ間ニ網狀トナレリ。結節ノ邊縁ニ於テハ正常ノ肝細胞索ヨリ腫瘍細胞ニ移行セル像ヲ認ムルヲ得。

3) 右葉右端前緣ノ腫瘍結節（前者ニ接近シテ存在セル小ナル結節）

腫瘍組織ハ結節狀ヲナシ、其ノ一部分ハ太キ結締組織ニ取り圍マレ、何レモ比較的細胞體ニ富メル多稜形或ハ骰子形ノ細胞ガ蜂窩狀ヲナス。稍々大ナル蜂窩ヲ形成スルモノハ、其ノ間ニ毛細血管網狀ニ交錯セリ。或ル部位ニ於テハ腫瘍細胞ハ全ク不規則ニ體樣變性ニ増殖セリ。細胞ノ或ルモノハ細胞體暗色ニシテ比較的小、或ルモノハ甚ダ大ニシテ空胞ヲ有セリ。Sudan III 染色ニヨリ細胞内ニ甚ダ多量ノ脂肪ヲ證明ス。其他 Mitose 多數ニ認メラル。亦數箇ノ核ヲ有スル巨大細胞ノ現ハレタル所アリ。

II) 肝門部及ビ腸間膜淋巴腺ニハ腫瘍組織ノ小ナル轉移竈ヲ認ム。

II 1) 下空靜脈閉鎖部

閉鎖膜ハ彈力纖維ニ富メル結締組織ヨリナリ層狀ヲ呈ス。此ノ組織ハ下空靜脈内膜ニ直接移行連續ス。且内膜ノ彈力膜ガ閉鎖膜部ノ組織ニ連續的ニ走行セル所アリ（附圖 Fig. 6 參照）。閉鎖膜結締組織ハ部位ニヨリテハ著シク硝子樣變化ヲ呈シ、肥厚セル血管内膜ト全ク同様ノ構造ヲ示ス。其ノ間所々ニ平滑筋束ノ走行セルヲ認ム。

閉鎖膜ノ下空靜脈ニ移行スル一部ニ於テハ結締組織ハ著シク硝子樣トナリ Weigert 氏彈力纖維染色法ニテ檢スルニ、閉鎖膜組織ノ彈力纖維ハ此ノ部位ニ於テ斷絶シ且走行不規則トナル。此ノ部分ニハ細血管ノ新生及ビ淋巴球、「プラスマ」細胞、「エオジン」嗜

好細胞等ノ浸潤ヲ認め、又結締織ノ一部ハ靜脈腔ニ接シテ稍々大ナル石灰沈着ヲ來セルヲ見ル。

閉鎖膜ノ起始スル下空靜脈後壁ニ於テハ内膜ハ甚シク肥厚シ、彈力纖維及ビ結締織纖維ノ肥大及ビ増加ヲ認め。

閉鎖部ヨリ下方ニ於ケル下空靜脈ハ内膜著明ニ肥厚シ、彈力纖維著シク増加セリ。結締織纖維ハ概ネ硝子樣變性ニ陥ル。肥厚セル内膜ノ表層ニハ所々石

灰ノ板狀沈着ヲ認め。中膜及ビ外膜ニモ結締織ノ増殖アリ。其ノ結締織纖維ハ甚ダ太ク硝子樣變性ヲ示セリ。此ノ部分ニハ稍々多數ノ淋巴細胞、「プラスマ」細胞、肥胖細胞ノ浸潤アリ。

IV) 肝靜脈

肝靜脈ハ内膜ノ一部分ニ於テ結締織ノ増殖、肥厚及ビ彈力纖維ノ増加ヲ認め。但シ石灰ノ沈着ヲ認めズ。

第 3 章 總 括 及 ビ 考 按

下空靜脈閉塞ニ就テハ 1644 年 Schenck 氏ニヨリ 2 症例ノ報告アリテ以來、續々トシテ其ノ報告ヲ見ルニ至リ、其ノ症例決シテ少シトセズ。本邦ニ於テハ最近 20 年來、朝岡、長與、内藤、額田、西川、木村男、那須、田宮、山極、木村哲、森半、星、衣川、中村、雲井、塚本、森喜、杉本、原田、長與一高橋、兼松一大久保、太田氏等ニヨリテ肝臟部下空靜脈ノ狭窄並ニ閉塞症例ノ報告アリ。

其ノ發生原因ニ就テハ諸説アリ。即チ Pleasants 氏ハ其ノ原因ヲ分ツテ 1) 血栓、2) 壓迫、3) 先天性等ヲ舉ゲ、兼松一大久保氏ハ先天性形成異常、微毒性及ビ血栓性靜脈内膜炎性ノ 3 者ヲ區別シ、長與一高橋氏ハ微毒性及ビ非微毒性ニ大別セリ。

今本例ニ於ケル下空靜脈閉塞ノ本態ヲ考察スルニ、臨牀的ニモ病理解剖學的ニモ微毒性病變ヲ缺キ、閉鎖セル膜ノ起首部ニ當ル後方靜脈壁ノ一部ハ内膜、筋層共ニ肥厚シ、而モ靜脈壁ニ輕度ノ炎症性變化ノ存在シ、一見靜脈内膜炎ニ起因セルガ如ク思考サルルモ、閉鎖膜ハ内膜ノ構造ヲ有シ之ガ直接靜脈内膜ヨリ連續セル所アリ。且彈力纖維殊ニ彈力膜ガ靜脈壁ヨリ閉鎖膜組織ヘ走行セル所アルガ故ニ、此ノ閉鎖膜ハ先天性形成異常ニ基キテ發生セルモノニシテ、前述ノ炎症性變化ハ其ノ後ニ生ジタル病變ナリト信ズ。

次ニ本例ニ於ケル肝臟ノ腫瘍ハ肝細胞ヨリ發生セル「ヘパトーム」ノ初期ニ屬スルモノナリ。從來組織發生ニ就テハ諸説アリ。腫瘍細胞ハ肝細胞ヨリ發生スト爲スモノ (Eberth, Hanot & Gilbert, Siegenbeck van Heukelom, 山極, 貴家), 或ハ膽管上皮細胞ヨリ發生スト爲スモノ (Naunyn, Waldeyer, Weigert), 或ハ兩者ヨリ發生スト爲スモノ (Thorel, 長與, 河内, 新島) 等アリテ、未ダ甲論乙駁解決サルルニ至ラズ。

「ヘパトーム」ノ發生母地ヲ決定センガ爲ニハ、先進諸家孰レモ所移行像ヲ認ムルヲ以テ最重要ナル論據ト爲シ檢索大ニ努メシモ之ニ遭遇スルコト甚ダ難ク、該移行像ヲ認め得タルモノ纔ニ泰西ニ於テハ Goldzieher & v. Vókay, Mirolubow, Siegenbeck van Heukelom, 本邦ニ於テハ貴家、内村、藤井、俣野、太田氏等ノ數氏ニ過ギズ。殊ニ貴家氏ハ實質性肝臟癌 17 例

中1例ニ於テ斯ノ如キ像ヲ認メ得、實質性肝臓癌ノ發生母地ヲ以テ肝細胞ニ歸納ス可キモノナルコトヲ事實ニ於テ確證シ得タリト爲セリ。然レドモ氏ハ更ニ云ヘリ。「從來學者ノ唱道シテ止マザル移行像ハ極メテ稀少ナル類例ニ於テ見ラルル所ノモノニシテ、唯々之ヲ千載ノ一遇ニ俟タザル可カラズ。且實質性肝臓ノ診斷上移行像ヲ云々スルガ如キハ、實ニ徒勞ト謂フ可キモノナリ。蓋シ大多數ノ場合ハ之ヲ見ル可ク時既ニ遅ク、病機ハ強ク進捗シ、轉タ古戰場ヲ弔フノ感無キ能ハズ」ト。是レ實ニ至言ナリト謂フ可シ。本例ハ偶斯ノ如キ稀有ニシテ貴重ナル肝臓ノ初期像ニ遭遇セルモノニシテ、正常肝細胞索ヨリ結節性増殖ヲ生ジ、更ニ腺腫、癌腫ニ至ル定型的移行像ノ各期ヲ證明シ得タルハ全く幸運ト謂ハザル可ラズ。

次ニ本例ニ於ケル「ヘパトーム」ノ原因ヲ考察センニ、本例ハ「ヘパトーム」ノ發生ニ密接ナル關係ヲ有スルモノト認メラルル肝硬變殊ニ鬱血性肝硬變ヲ伴ヘルハ、原因的ニ最も重大ナル意義ヲ有スルモノナリト謂フヲ得ベシ。

抑々「ヘパトーム」ノ原因ニ關シテハ、諸家競ヒテ其ノ本態ノ解決ニ努力シ、幾多ノ業績輩出セリト雖モ、最も見ル可キモノヲ山極、貴家氏ノ業績ナリトス。一般ニ原發性肝臓癌ノ大多數ハ肝硬變ヲ母地トシテ發生シ、之ト密接ナル關係ヲ有スルモノナルコトハ一般ニ認メラレタル事實ナリ。即チ山極氏ハ38例中硬變ヲ伴ヘルモノ33例(86.84%)ヲ得、肝硬變ト「ヘパトーム」トノ同時共存ハ「ヘパトーム」ノ發生原因上重大ノ意義アリトセリ。尙ホ原因トシテ最も重要視セララルルハ「アルコール」ニシテ、肝硬變就中萎縮性肝硬變ノ原因的要素タルノミナラズ同時ニ延ヒテハ癌發生ノ因ヲ爲スモノナリ。Eggel, 貴家, 原田氏等ハ其ノ他微毒, 「マラリア」, 寄生蟲, 膽石症, 鬱血肝, 外傷, 遺傳の素因等ヲモ原因トシテ數ヘタリ。殊ニ肝臓ノ鬱血ハ此ノ際重大ナル意義アルモノニシテ、肝臓ノ鬱血ヲ來スヤ肝細胞ハ一方退行變性ヲ來スト共ニ他方補綴的再生的變性即チ肥大及ビ増生ヲ來シ、「ヘパトーム」ノ母地ヲナスモノナルハ山極、貴家、岡田其ノ他ノ諸家ノ説ク所ナリ。

而シテ又下空靜脈ノ狹窄乃至閉塞ノ肝臓及ビ其ノ他臟器ニ及ボス影響ニ關シテハ既ニ Pleasants, Chiari, 長興, 西川, 塚本, 森喜氏等ニヨリテ論ゼラレ、該部以下ノ末梢部ハ鬱血症狀ヲ發現シ、肝臓ニ於テハ彼ノ Laennec 氏肝硬變トハ全く相異レル像ヲ示シ、結締織増殖ハ肝靜脈ヲ中心トシテ漸次肝小葉間ニ及ビ、小葉ハ爲メニ大小不同ノ實質分野ニ區劃セララルルニ至リ、一方此ノ増殖ニ拮抗センガ爲メ往々結節狀増生ヲ見ルモノナリト云ハレタリ。而モ斯カル結節狀増生ノ癌腫發生ノ母地タリ得ルコトハ既ニ山極、貴家氏等ノ研究ニ由リテ明ナル所ナリ。

尙ホ本「ヘパトーム」ノ多中心性ナルハ、處ヲ異ニシテ移行像ノ存在セルコト及ビ結節狀増生ヲ數箇所ニ見タル點ヨリ明ナル所ニシテ、即チ癌腫發生要約ガ肝臓内ニ於テ比較的廣汎ニ存在スルモノナリト謂フ可シ。即チ本例ハ下空靜脈閉塞性變化ニ基キ來ル鬱血性肝硬變ト密接ナル關聯ヲ以テ「ヘパトーム」ヲ發生シタルモノト看做ス可キモノニシテ、換言スレバ「ヘパトーム」ト下空靜脈閉塞性變化トガ一定ノ因果關係ヲ有スルモノナリト信ズ。

第 4 章 結 論

1) 本例ハ 29 歳ノ男子ニ於テ、臨牀上下空静脈閉塞ノ症候ヲ呈シ、剖検上下空静脈閉塞竝ニ「ヘパトーム」ノ存在ヲ認メタル 1 例ナリ。

2) 本例ニ於ケル下空静脈閉塞ハ先天性形成異常ニ基クモノニシテ、肝硬變ハ下空静脈閉塞ニヨル慢性鬱血ニ因リテ惹起セラレタルモノナリ。

3) 從テ本例ニ於ケル「ヘパトーム」ハ鬱血性肝硬變ヲ母地トシテ發生セシモノニシテ、下空静脈閉塞トハ密接ナル因果關係ヲ有スルモノナリ。

4) 本例ニ於ケル「ヘパトーム」ハ多中心性ニ發生セル初期腫瘍ニシテ、明ニ肝細胞ヲ母組織トセル移行像ヲ證明ス。

拙筆スルニ蒞ミ、終始御懇篤ナル御指導ト御校閲ノ勞ヲ忝フセシ恩師田部教授ニ對シテ滿腔ノ感謝ノ意ヲ表シ、併セテ種々有益ナル御助言ヲ賜ハリシ濱崎助教授竝ニ河村學士ニ深謝ス。

主 要 文 獻

- 1) 朝岡, 京都醫學雜誌, 第 8 卷, 24—26 頁, 明治 44 年.
- 2) Chiari, Ziegler's Beitr, Bd. 26 S. 1—18, 1899.
- 3) Eberth, Virchow's Arch, Bd. 43, S. 1—8, 1868.
- 4) Eggel, Ziegler's Beitr, Bd. 30, S. 506—604, 1901.
- 5) Eppinger, z. n. 西川.
- 6) 藤井, 日本病理學會雜誌, 第 2 卷, 351—354 頁, 大正 2 年; 癌, 第 6 年, S. 99—130 頁, 大正元年.
- 7) Goldschiefer & v. Vókay, Virchow's Arch, Bd. 203, S. 75—131, 1911.
- 8) Hanot & Gilbert, z. n. Eggel.
- 9) 原田, 臨牀醫學, 第 15 年, 125 頁, 昭和 2 年.
- 10) 原田, 癌, 第 15 年, 229—252 頁, 大正 10 年.
- 11) 原田, 病理ト治療, 第 1 卷, 325—342 頁, 昭和 3 年.
- 12) 星, 十全會雜誌, 第 28 卷, 289—291 頁, 大正 12 年.
- 13) 兼松, 大久保, 日本病理學會雜誌, 第 18 卷, 395—398 頁, 昭和 3 年.
- 14) 河内, 大阪醫學會雜誌, 第 12 卷, 53—54 頁, 大正 2 年.
- 15) 貴家, 東京醫學會雜誌, 第 22 卷, 498—506 頁, 明治 41 年.
- 16) 貴家, 癌, 第 2 年, 第 3 冊, 906—1077 頁, 明治 42 年; 第 3 年, 第 1—2 冊, 1—420 頁, 明治 42 年.
- 17) 貴家, 癌, 第 23 年, 第 4 冊, 341—397 頁, 昭和 4 年.
- 18) 木村, 日本病理學會雜誌, 第 6 卷, 150—151 頁, 大正 5 年.
- 19) 木村, 中外醫事新報, 第 959, 267—276 頁; 第 960, 354—366 頁; 第 961 號, 410—422 頁, 大正 9 年.
- 20) 木村, 日本病理學會雜誌, 第 11 卷, 324—333 頁, 大正 10 年.
- 21) 木村, 成醫會雜誌, 第 460 號, 123—198 頁, 大正 10 年.
- 22) 衣川, 日本病理學會雜誌, 第 13 卷, 726 頁, 大正 12 年.
- 23) 雲井, 臨牀醫學, 第 13 年, 104—105 頁, 大正 14 年; 日本內科學會雜誌, 第 12 卷, 1098 頁, 大正 13—14 年.
- 24) 俣野, 癌, 第 17 年, 304—308 頁, 大正 12 年.
- 25) 俣野, 京都府立醫科大學雜誌, 第 94 號, 49 頁, 大正 12 年.
- 26) Mirolubow, Virchow's Arch, Bd. 209, S. 367—431, 1921.
- 27) 森, 日本內科學會雜誌, 第 8 卷, 337—338 頁, 大正 9 年.
- 28) 森, 十全會雜誌, 第 31 卷, 1—62 頁, 大正 15 年.
- 29) 長與, 第 3 回日本醫學會誌, 94—97 頁, 明治 44 年.
- 30) 長與, 東大紀要, 第 9 卷, 1—59 頁, 1909.
- 31) 長與, 第 4 回日本病理學會雜誌, 31—72 頁, 大正 4 年.
- 32) 長與, 高橋, 日本病理學會雜誌, 第 17 卷, 194—198 頁, 昭和 2 年.
- 33) 内藤, 內科學雜誌, 第 7 卷, 307—312 頁, 大正 3 年.
- 34) 内藤, 醫事新聞, 第 1105 號, 大正 11 年.
- 35) 中村, 臨牀醫學, 第 12 年, 896—900 頁, 大正 13 年.

八木論文附圖

Fig. 1.

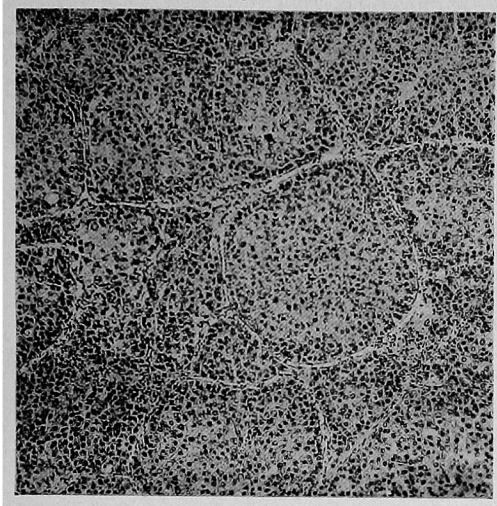


Fig. 2.

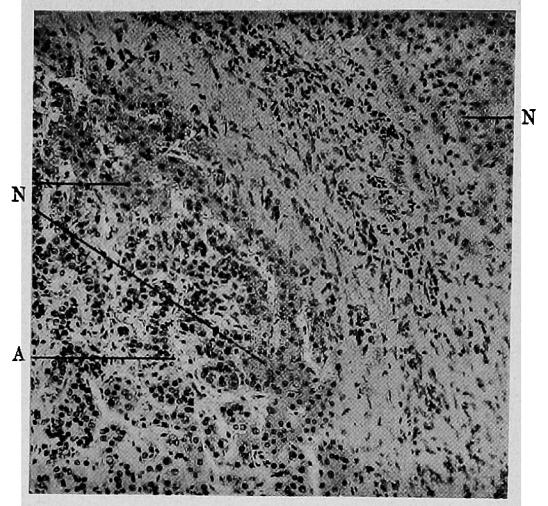


Fig. 3.

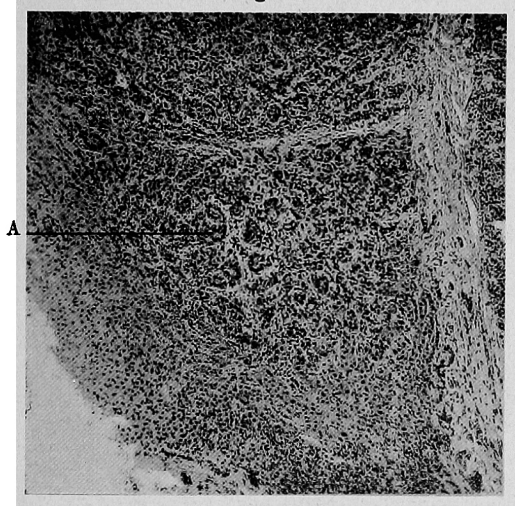


Fig. 4.

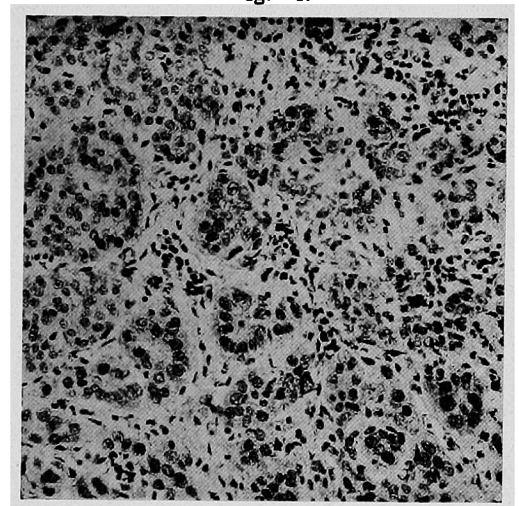


Fig. 5.

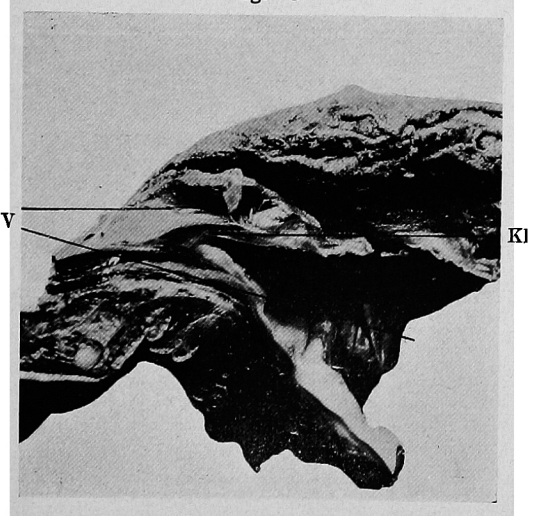
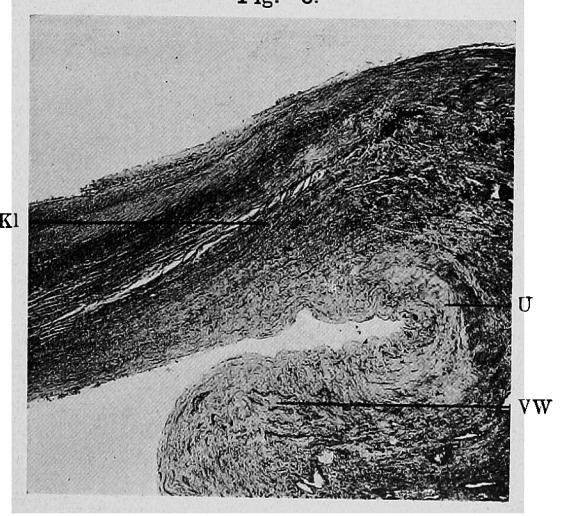


Fig. 6.



- 36) 那須, 東北醫學雜誌, 第3卷, 275—297頁, 大正7年. 37) *Naunyn*, z. n. 貴家. 38) 新島, 京都醫學雜誌, 第22卷, 1515—1535頁, 大正14年. 39) 西川, 中外醫事新報, 第871號, 826—827頁, 大正5年; 日本病理學會雜誌, 第6卷, 143—152頁, 大正5年. 40) 西川, 東大紀要, 第20卷, 151—305頁, 1918. 41) 額田, 內科學雜誌, 第7卷, 123—131頁, 大正3年. 42) 額田, 東大紀要, 第11卷, 485—493頁, 1914. 43) 岡田, 十全會雜誌, 第32卷, 649—720頁, 昭和2年. 44) 太田, 東京醫事新誌, 第2676號, 1185—1193頁, 昭和5年. 45) *Pleasant*, Johns Hopkins Hosp. Rep, Vol. 16, p. 363—548, 1911. 46) *Rosenblatt*, z. n. 西川. 47) *Schenck*, z. n. *Pleasant*. 48) *Siegenbeck van Heukelom*, Ziegler's Beitr. Bd. 16, S. 341—387, 1894. 49) 杉本, 岡醫雜誌, 第433號, 223頁, 大正15年. 50) 田宮, 北越醫學會雜誌, 第33年, 569—570頁, 大正7年. 51) *Thorel*, Ziegler's Beitr. Bd. 18, S. 498—514, 1895. 52) 塚本, 北越醫學會雜誌, 第40年, 92—93頁, 大正14年. 53) 内村, 癌, 第17年, 103—115頁, 大正12年. 54) *Waldeyer*, Virchow's Arch, Bd. 55, S. 67—159, 1872. 55) *Weigert*, z. n. 貴家. 56) 山極, 成醫會月報, 第285號, 1—14頁, 明治38年. 57) 山極, 癌, 第1年, 60—136頁, 明治40年. 58) 山極, 癌, 第2年, 309—319頁, 明治41年. 59) 山極, 癌, 第4年, 109—122頁, 明治43年. 60) 山極, 癌, 第5年, 225—282頁, 明治44年. 61) 山極, 日新醫學, 第3年, 513—554頁, 大正2—3年. 62) 山極, 日新醫學, 第4年, 1441—1487頁, 大正3—4年. 63) 山極, 日本病理學會雜誌, 第5卷, 13—52頁, 大正5年; 癌, 第9年, 87—123頁, 大正4年. 64) 山極, 中外醫事新報, 第931號, 1—12頁, 大正8年. 65) 山極, 東大紀要, 第5卷, S. 57, 1901. 66) 山極, Virchow's Arch, Bd. 206, S. 437—467, 1911. 67) 山極, Virchow's Arch, Bd. 212, S. 190, 1913. 68) 山根, 日本內科學會雜誌, 第5卷, 101—106頁, 大正6年. 69) 山根, 福岡醫科大學雜誌, 第12卷, 第1—2號, 大正8年. 70) 山根, 日本病理學會雜誌, 第8卷, 544—549頁, 大正8年; 癌, 第12年, 197—199頁, 大正7年. 71) 山根, 東京醫事新誌, 第2434號, 1803—1805頁, 大正14年.

附 圖 說 明

Fig. 1. 蜂窩狀肝細胞癌(肝右葉右端前縁部)

Hämatoxylin-Eosin 染色

Zeiss. Ok. 5 × Obj. 10

Fig. 2. 肝細胞ノ腺腫性變化(A)(肝右葉凸面部)

正常肝細胞索(N)トノ移行部ヲ示ス.

Hämatoxylin-Eosin 染色

Zeiss. Ok. 5 × Obj. 20

Fig. 3. 肝細胞ノ腺腫性増殖(肝右葉右端前縁部)(A)

Hämatoxylin-Eosin 染色

Zeiss. Ok. 5 × Obj. 10

Fig. 4. Fig. 3 = 同ジ.

Zeiss. Ok. 7 × Obj. 20

Fig. 5. 下空靜脈閉塞部内眼標本縦断面

V = 下空靜脈

Kl = 閉鎖膜

Fig. 6. 下空靜脈閉塞部顯微鏡標本

Hämatoxylin-Eosin 染色

Zeiss. Planar F = 2.0 mm

Kamerallänge 50 cm

Kl = 閉鎖膜. U = 内膜ノ靜脈壁ヨリ閉鎖膜ヘノ完全ナル移行ヲ示ス. VW = 下空靜脈壁.